

# 玄奘における『仏地経論』・『成唯識論』訳出の意図

長谷川 岳 史

## 一、問題の所在

玄奘(六〇二〜六六四)の訳出した仏典の総計は七五部一三三五巻にのぼるが、その中の論書において著者を記載するに際し、「等」とつけて複数の著者を予想せしめるものがある。

- ①五百大阿羅漢等造『阿毘達磨大毘婆沙論』(二〇〇巻)
- ②最勝子等造『瑜伽師地論積』(一卷)
- ③親光菩薩等造『仏地経論』(七巻)
- ④護法等菩薩造『成唯識論』(二〇巻)

この内、①②に関しては原本と想定される資料が梵本か藏訳にあり、比較検討することが可能である。

③④に関しては、③は親光(Bandhuprabha?・六〜七世紀)の名のみが伝えられ、「等」が誰を意味するのか不明であり、④は唯識十大論師の『唯識三十頌』の注釈を合糅し、護法(Dharmapala・五三〇〜五六二)説を正義として訳出したと伝えられている。

印度學佛教學研究第四十八卷第二号 平成十二年三月

ここで③④に関係すると思われる梵・藏に残される資料について述べると、③に関しては藏訳に戒賢(Shāhāda・五二九〜六四五)造『仏地経註』がある。戒賢は玄奘が留学中に師事した人物であり、親光同様、護法の門人であったと伝えられる。この戒賢『仏地経註』と③を比較すると、③には明らかに戒賢『仏地経註』が編入された形跡があるものの、③は戒賢『仏地経註』の倍以上の分量があり、しかも戒賢の説は、玄奘が師事していたのにも関わらず、必ずしも正義として扱われていない。

次に④であるが、これには十大論師の一人、安慧(Sāhānati・四七〇〜五五〇か五一〇〜五七〇頃)の『唯識三十頌』の注釈が梵本に現存するものの、これが④に忠実に編入された形跡はほとんど見受けられない。

そこで③④に関して浮び上がってくる疑問は、従来問題とされているように、第一に、果たして玄奘は親光の『仏地経』の注釈、護法の『唯識三十頌』の注釈というものをもとに③

④を訳出しているのかということ、第二に、玄奘は自らの留学中に構築した学説、あるいは帰国後、諸経論の訳出過程において構築した学説を訳書中に反映させる意図をもって、親光・護法の名のもとに③④を編纂的に著作したのではないかということである。

この疑問を説く鍵となるのが、③④両者の間にみられる類似した記述である。勝又俊教氏は、③④両者間には以下のテーマに関する類似した記述があることを指摘している。<sup>1)</sup>

・四分説について

・四智心品の見相二分の有無について

・四智の体について

・四智の所縁について

・転識得智の位次について

・不離識の唯識について

・清浄法界は有漏か無漏かについて

・仏の三身の身土と仏の所化の有情との共、不共について

筆者が調べたところ類似点はこれにとどまらないが、残念なことに、勝又氏はインドにおける護法の『成唯識論』から彼の門人であった親光の『仏地経論』への影響という観点でこの類似点をみており、親光が『仏地経論』を造るにあたって、護法の『成唯識論』を参照したとし、先の疑問点には答えていない。

そこで本研究では先にあげた疑問点をもとに、③親光菩薩等造『仏地経論』と④護法等菩薩造『成唯識論』の間の類似点は、玄奘自身が自らの学説を展開・確立させるために記した部分ではないかと仮定して、両書の訳出年代等を考慮し、玄奘における『仏地経論』から『成唯識論』への思想的展開が窺える箇所をいくつか検討してみようと思う。

## 二、転識得智に関する『仏地経論』・『成唯識論』の記述

（八七五六説）

阿頼耶識——大円鏡智

末那識——平等性智

前五識——妙觀察智

意識——成所作智

（八七六五説）

阿頼耶識——大円鏡智

末那識——平等性智

意識——妙觀察智

前五識——成所作智

転識得智説は、唯識説における転迷開悟の内容を明らかにしたものであることは周知のとおりであるが、この説が具体的に述べられている資料は実はそれほど多くはない。また、この転識得智説は普通、右記の「八七六五」説として解釈されているが、漢訳資料の中には「八七五六」説を述べているものもあり、複雑な問題をはらんでいるのである。いま、転識得智説が述べられる主要な資料を取り上げると以下のようなになる。

〔漢 訳〕

・波羅頗蜜多羅訳六三〇年夏く六三二年冬訳出、六三三年春奏上  
無著造『大乘莊嚴經論』卷三（大正三一、六〇六下く六〇七上）

〔宮内省本〕

四智鏡不動 三智之所依 八七五六識 次第転得故

积日（中略）八七五六識次第転得故者。転第八識得鏡智。転

第七識得平等智。転五識得観智。転第六識得作事智。

〔宋・元・明・麗（大正蔵）本〕

四智鏡不動 三智之所依 八七六五識 次第転得故

积日（中略）八七六五識次第転得故者。転第八識得鏡智。転

第七識得平等智。転第六識得観智。転前五識得作事智。

・玄奘訳（六四七年三月一日く六四九年六月一七日訳出）

無性造『撰大乘論积』（以下『無性撰論』）卷九（大正三一、四

三八上）

〔宮内省・宋・元・明本〕

転五現識故。得妙觀察智。具足一切陀羅尼門三摩地門。猶如

宝蔵。於大会中能現一切自在作用。能断諸疑能雨法雨。

転意識故。得成所作智。普於十方一切世界。能現變化從觀史

多天宮而没乃至涅槃。能現住持一切有情利樂事故。

〔麗本（大正蔵）〕

転意識故。得妙觀察智。具足一切陀羅尼門三摩地門。猶如宝

蔵。於大会中能現一切自在作用。能断諸疑能雨法雨。

転五識故。得成所作智。普於十方一切世界。能現變化從觀史

多天宮而没乃至涅槃。能現住持一切有情利樂事故。

玄奘における『仏地経論』・『成唯識論』訳出の意図（長谷川）

・玄奘訳（六四九年一〇月三日く十一月二四日訳出）  
親光等造『仏地経論』卷三（大正二六、三〇二下）

転第八識得大円鏡智相應心。能持一切功德種子。能現能生一

切身土智影像故。転第七識得平等性智相應心。遠離二執自他

差別。証得一切平等性故。転第六識得妙觀察智相應心。能観

一切皆無礙故。転五現識得成所作智相應心。能現成辦外所作故。

復有義者。転第六識得成所作。転五現識得妙觀察。此不応爾。

非次第故。

・玄奘訳（六五九年閏一〇月訳出完了、一二月三〇日説あり）

護法等造『成唯識論』卷一〇（新導本卷一〇、一五頁）

此転有漏八七六五識相應品。如次而得。智雖非識而依識転。識

為主故説転識得。又有漏位智劣識強。無漏位中智強識劣。為

〔蔵 訳〕

・安慧『大乘莊嚴經論积疏』（『菩薩品』梵本第五二偈（転依）に

対する前文）

八識の内、阿頼耶（識）が清浄になると大円鏡智になる。染

汚意が清浄になると平等性智になる。意識が清浄になると妙

觀察智になる。眼（識）乃至身（識）の五識が清浄になると

成所作智になる。（この）四智と清浄法界との五つを得ること

を五つの転依という。<sup>3</sup>

これら資料の内、漢訳の波羅頗蜜多羅（Pārahāṅgama）・五

六五く六三三、六二六か六二七入唐）訳『大乘莊嚴經論』、玄奘

訳『無性撰論』には梵本や蔵訳といった比較資料が存する。しかしながら、上記の内容は漢訳のみにもみられるものなのである。つまり、この両書にみられる転識得智説は訳者の意図による挿入・加筆の可能性が高い。また、この両資料は版本によつて「八七六五」説を説くものと「八七五六」説を説くものとに分かれるという問題を有している。では、この両書の元の形はどちらの説であつたのかというと、玄奘の弟子達（基・慧沼等）が自らの著作にこの両書を引用する際、「八七五六」説を説く文献として取り扱っていることから、この両書は「八七五六」説を説く文献として訳出されていたことが知られるのである<sup>(4)</sup>。

このことを踏まえた上で、以下、これら転識得智説がみられる資料を検討してみると、漢訳資料にみられる転識得智説は、『大乘莊嚴経論』以外は玄奘訳に集中してみられることがわかる。さらに、これらを訳出年代順に並べてみると玄奘の意図が窺えるような展開がみられる。

- ・波羅頗蜜多羅訳『大乘莊嚴経論』……「八七五六」説
- ・玄奘訳『無性撰論』……「八七五六」説
- ・玄奘訳『仏地経論』……「八七六五」説（正説）
- ・玄奘訳『異説・排斥』……「八七五六」説
- ・玄奘訳『成唯識論』……「八七六五」説

これらを見てわかるように玄奘訳『仏地経論』において「八

七五六」説から「八七六五」説への切り換え、修正とも思えるような処理がみられる。これをどうみるか、佐久間秀範氏は、『大乘莊嚴経論』・『無性撰論』にみられる「八七五六」説は、訳者である波羅頗蜜多羅と玄奘によるものであるとみる。そしてその理由として、もともと異説の立場をとっていた波羅頗蜜多羅に、玄奘が長安出發以前に会見していた可能性を指摘し、玄奘は『仏地経論』の訳出（六四九年一〇月三日〜一月二四日）にあたり何等かの思想的変化を生じ、転識得智に関する考えを異説から正説へと切り換え、これまで自らがつてきた立場を「不応爾」として排斥したとも考えられるとみている<sup>(5)</sup>。筆者もこの佐久間氏の考えに賛同するが、しかし、なぜ玄奘は『仏地経論』において転識得智説に関する考えを切り換えたのかという疑問は残る。

### 三、五法と三身の関係

ここでは『仏地経論』と『成唯識論』との記述がほぼ一致し、さらにその記述がこの両書独自のものである箇所についてみる。ここで取り上げるのは五法（清淨法界・四智）と三身（自性身・受用身（自・他）・変化身）の関係を述べた部分であり、両書はまず排斥されるべき説を述べた後、両書にしかみられない正義とされる説を述べる。紙面の都合上、ここでは排斥されるべき説を述べている部分を比較する。

・玄奘訳親光等造『仏地経論』卷七（大正二六、三二五下〜三二六上）

又前五法撰三身者。有義前二（清浄法界・大円鏡智）撰自性身。中間二種（平等性智・妙觀察智）撰受用身。成所作智撰变化身。經說真如是法身故。論說転去阿頼耶識得自性身。大円鏡智転第八得。故知前二撰自性身。此経中說。成所作智起諸化業。莊嚴論說。成所作智。於一切界發起種種無量難思諸变化事。故知後一撰变化身。平等性智如余論說。能於浄土隨諸菩薩所樂。示現種種仏身。妙觀察智亦如論說。於大集会能現一切自在作用説法斷疑。又説転去諸転識故得受用身。故知中二撰受用身。又仏三身皆十義中智殊勝撰。故知三身皆得有智。

※（一）内：筆者註

・玄奘訳護法等造『成唯識論』卷一〇（新導本卷一〇、二六〜二七頁）

以五法性撰三身者。有義。初二（清浄法界・大円鏡智）撰自性身。經說真如是法身故。論說転去阿頼耶識得自性身。円鏡智品転去蔵識而証得故。中二智品（平等性智・妙觀察智）撰受用身。説平等智於純浄土為諸菩薩現仏身故。説觀察智大集會中説法。斷疑現自在故。説転諸転識得受用身故。後一智品（成所作智）撰变化身。説成事智於十方土現無量種種難思化故。又智殊勝具撰三身。故知三身皆有実智。 ※（一）内：筆者註

これらを見てわかるように、経論の引用・会通の挿入の仕方が異なるものの内容はほぼ同様である。これはこの後に述べ

玄奘における『仏地経論』・『成唯識論』訳出の意図（長谷川）

られる正義についてもいえる。この排斥説については両書をはじめ、誰の説であるのか具体的に明らかにしている文献はないが、実はこの説は戒賢『仏地経註』と安慧『大乘莊嚴經論釈疏』の説であることが指摘されている<sup>(6)</sup>。このように同様の手順で独自の正義を述べていることから考えて、こういった記述の一致は玄奘の手によるものと理解すべきであると思う。

#### 四、結語

これまで、玄奘訳の『仏地経論』と『成唯識論』の関係が窺える箇所をみてきたが、そこから推測できる関係の仕方は様々である。ここでそのパターンを整理してみる。

①玄奘がそれまでの自らの考えを修正し、それを表明する場としての『仏地経論』とそれを確定するための『成唯識論』。

②玄奘が自らの考えを『仏地経論』で表明し、『成唯識論』もそれを引き継ぐ。

③『仏地経論』で表明した内容を、『成唯識論』で修正する。

この内、①②に関してはこれまでみてきたが、③に関しては触れることができなかった。これは、冒頭で述べた勝又氏が指摘する「清浄法界は有漏か無漏か」の問題を述べる箇所にもみられるのであるが、玄奘が『仏地経論』に続いて、『成唯識論』を編纂的に翻訳（あるいは著作）せざるを得なかった事情を考える場合に、③の視点が大きな役割を果たすように

玄奘における『仏地経論』・『成唯識論』訳出の意図（長谷川）

思う。さらに『仏地経論』と『成唯識論』というこの特殊な文献を解説する場合には、玄奘が、漢訳されていない戒賢『仏地経註』はもちろんのこと、安慧『大乘莊嚴経論釈疏』も知っていた可能性も考えなければならぬだろう。特に玄奘が転識得智説に関する考えを改めた背景には、この安慧の影響を考慮する必要がある。あわせて、なぜ玄奘の翻訳には『大乘莊嚴経論』系の文献が含まれていないのかという問題も以外に大きな意味を持つと思われる、これは波羅頗蜜多羅との関係も念頭において考えるべきである。

- 1 『仏教における心識説の研究』（山喜房仏書林、一九六一年）一六五～一八九頁
- 2 註1、一八八頁
- 3 西藏文典研究会『西藏文献による仏教思想研究』一（山喜房仏書林、一九七九年）一七頁、P. Mi 128a-4～5, D. Mi 113b-4～5.
- 4 拙稿「転識得智に関する唯識諸家の見解—インド・中国篇—」（『龍谷大学仏教学研究室年報』七、一九九四年）
- 5 「智」と「識」（『豊山学報』二八・二九、一九八四年）
- 6 拙稿「唯識説における仏身論と五法説」（『仏教学研究』五一、一九九五年）

〈キーワード〉 玄奘、『仏地経論』、『成唯識論』

（龍谷大学講師）

### 会費に関する内規

- (1) 会費は、年額次の通りとする。
  - ① 普通会員 六、五〇〇円
  - ② 名誉会員 免除
  - ③ 維持会員 従来の負担額
  - ④ 特別維持会員 五〇、〇〇〇円以上
  - ⑤ 準会員 六、五〇〇円
- (2) 本内規の変更は理事会の議決による。
- (3) 本内規は平成五年五月二十二日より施行する。